



Title	英語前置詞atの意味論―「点」を生み出すメカニズム―
Author(s)	田尾, 俊輔
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/103110
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (田 尾 俊 輔)	
論文題名	英語前置詞atの意味論 ―「点」を生み出すメカニズム―
<p>論文内容の要旨</p> <p>本論考は、(i)英語前置詞atの意味は何であるのか、そして、(ii)その意味がどのようなメカニズムで生じているのかという2つの問いについて議論した。前置詞atは狭小の「点」だけでなく広がりを持った「場所」を指すこともあり、一見相反する2つの意味が共存しているというのが興味深い現象である。私たちの視界においては、目立つ（前景化される）要素が多くなればなるほど「場所」として認識され、目立たなくなる（背景化される）要素が多くなればなるほど「点」として認識されると考えられる（図1を参照）。そして、この前景化・背景化というシンプルな認知基盤によって前置詞atの意味が作り出されることを多様な文例パターンの分析・考察を通して明らかにした。</p> <div><div>a.</div><div>b.</div><div>c.</div></div> <p>図1：点として見なせるかどうか（筆者作成）</p> <p>本論考の構成としては、まずは第1章で言語学における意味論の位置づけを確認し、第2章で英語前置詞の意味研究がどのようになされてきたのか、その中でも前置詞atの意味がこれまでにどのように分析されてきたのかを把握した。すなわち、第1章と第2章は先行研究の概観にあたる。また第2章においては、先行研究に基づき、冒頭で示した(i)と(ii)の2つの問いとそれらに対する本論考の主張を提示した。その主張は、下記の通りである。この主張を具体的な文例を通して検証するのが第3章以降である。第3章では空間や時間を表す英語前置詞at、第4章では動詞句における英語前置詞at、第5章では形容詞句における英語前置詞at、第6章では名詞句における英語前置詞atをそれぞれ扱った。最後の第7章では、本論考の結論としてまとめと意義、今後の課題を示した。</p> <p>(i)の問いに対する主張：英語前置詞atには「点」と「場所（ところ）」の2つの意味を大きく想定することができ、両者は認知基盤を表すスーパー・スキーマとして統合することができる一方で、「点」と「場所」の2つの意味がどちらも重要な役割を果たす。Tuggy (1993) に基づくと、両者は同音異義寄りの多義の関係にある。</p> <p>(ii)の問いに対する主張：以下の3つである。</p> <p>a. [X at Y]という表現形式には、図のXと地のYという位置関係だけでなく、この表現を使用する人（話し手／書き手）がYを俯瞰するという関係も関与する。言い換えると、図と地の構造の関係が二重に存在する。</p> <p>b. 話し手／書き手がYを俯瞰する際には、Y以外（すなわち、Yの背景）の部分が必要になる。すなわち、Yが図でY以外が地となっている。</p> <p>c. Y以外の部分がどの程度前景化（もしくは背景化）されるかによって、前置詞atが指すのが「点」であるのか「場所」であるのかが決まってくる。</p> <p>各章のより具体的な内容は次の通りである。第1章では、意味の側面から言語の仕組みを解明しようとする意味論における考え方として、語に1つの意味を結びつける単義、2つ以上の意味を結びつける多義、語の意味ではなく使い方を覚えることを重視する多使用の意味観をそれぞれ紹介した。また、言語学と教育文法が目指す方向性は異なることを指摘し、本論考では言語学の視点から、いかに人間が言語を使えるようになるかを意識した研究を行うことを述べた。そして、本論考では多義の意味観に立脚し、前置詞atの意味を包括的に説明できる上位スキーマ（スーパー・スキーマ）は何であるのかを明らかにするというスタンスであることを確認した。それは、結果として、想定され得る下位スキーマの有効性を検証することにもなると思われる。</p>	

第2章では、前置詞の機能として、先行詞と目的語の関係を表示するものであることを確認した後、イメージ・スキーマや図・地、前景化・背景化という概念を概観した。これらの概念をもとに、代表的には前置詞overの意味分析がなされてきた (Brugman 1981, Lakoff 1987, Dewell 1994など)。言語使用者が状況をどのように捉えているかが言語表現に反映されていると考える認知言語学において、主として空間の状況を表す前置詞を研究することは親和性があるのである (Tyler & Evans 2003)。しかしながら、イメージ・スキーマを描くことが難しい前置詞byのような事例があり、語の意味ではなく使い方を覚えるという多使用の考えに繋がる流れもある (平沢2019)。本論考で扱う前置詞atについては、「点」や「場所 (ところ)」の意味のどちらを中心義として採用すべきかという議論だけでなく、そもそもの前置詞atの機能として位置や区域を指定するものであるという考え方も提出されている。このように、前置詞atの意味は何であるのかという議論にはまとまりがない状況である。上述の背景を受けて、冒頭で述べた (i) と (ii) の2つの問いを提起し、主張を提示した。

ここからは具体的な分析・考察の章である。第3章では、空間や時間を表す前置詞atを扱った。まず、空間を表す前置詞atについて、at the stationという表現は駅を移動の着点として捉えることもあれば、駅の構内でも構外でも指せることもある。前者は「点」であるが、後者は駅の周辺の空間構造を前景化し、ある程度の広がりのある「場所」であると考えられる。くつろいでいる状態を表すat homeは、家具などの家の中の構造もその状態には関係しているため、それらが前景化して広がりのある「場所」と捉えることができる。時間表現については、at 2.30は時間の一点を表すものの、at nightでは時間の流れを意識しないという文化的な慣習の裏付け (Wierzbicka 1993) が前景化し、広がりのある「場所」のように捉えられる。また、at Christmasはクリスマスの期間を指す表現であるが、その時期のイベントや雰囲気といった空間的情報が前景化されることにより、ひとまとまりの期間として表すことができるようになっており、前置詞atが単に「点」としてだけでなく「場所」も指すことができるという機能が影響している。また、We got off the ship at all ports (Lindstromberg 2010: 174) という文では、移動経路が前景化してランドマークとして機能し、トラジェクター (この場合はall ports) の位置が示されることを説明した。

第4章では、動詞句における前置詞atを扱った。John shot at the elephant (岡本他1998: 173) をはじめとする動能構文では、行為が対象に命中する場合には、周辺が背景化されて「点」として捉えられるが、対象から外れる場合には周辺が前景化されて「場所」として捉えられる。同じく動能構文であるThe cat scratched at the door (久野・高見2017: 96) では、引っ掻く行為の成立は前提であり、飼い主の注意を惹きつける等の別の目的があると想定される。接触以降の状態変化が前景化され、「場所」として見なされる。このように、前置詞atには「点」と「場所」の2つの意味があるため、動能構文の多様な意味が生まれると考えられる。また、He threw the ball at me rather than to me (野村2020: 151) の擬似与格構文では、攻撃的な意味合いが出てくるとされる。ここでも標的に当たって「点」と見なせる場合と標的から外れて「場所」と見なせる可能性がどちらもあるからこそ、狙うという攻撃的な意味が生じると考えられる。The dog ran at me (イ2024a: 120) のように移動自動詞に前置詞atが後続する場合は攻撃的な勢いの意味が付加されるが、近づくこと自体が影響を及ぼす要因になっており、空間構造が前景化されて「場所」として捉えられる。コミュニケーション動詞に前置詞atが後続する場合も同様の現象が見られる。

第5章では、形容詞句における前置詞atを扱った。感情形容詞に前置詞atが後続する場合、その感情は持続期間が短いものとされる (Osmond 1997)。他方、持続時間が長い感情の場合には前置詞withを伴うとされる。しかしながら、コーパス (COCA) からの実例を観察すると多様な前置詞が後続している。そこで、持続時間が長くポジティブな感情である喜び、持続時間が短くネガティブな感情である怒り、持続時間が短く中立的な感情である驚きを表す形容詞を選定し、形容詞の後に来る前置詞と名詞の傾向を分析、考察した。その結果、怒り、驚き、喜びの順で前置詞atを伴う傾向が小さくなり、前置詞atの目的語としては、怒りの場合は人であることが多い一方で、驚きと喜びの場合は人であることが少ないということがわかった。また、その目的語は具体的な場面や状況を指すことになっている。前置詞atによって、感情が向けられる対象の周辺の空間や時間、そこでの出来事が前景化され、その場所でもリアルタイムに抱く感情が表せるようになっていないかと考えられる。また、She is good at swimming (ジーニアス英和大辞典) のような得手不得手を表す形容詞に後続する前置詞atについては、日本語で対応すると考えられる二格表現と対照させながら議論し、goodという属性を述べた上でそこに特定の情報を付け足しており、局所的な「点」を表すことを説明した。さらに、第4章の動詞句における前置詞atとの関連で言えば、動能構文と感情形容詞では後続する前置詞atが起点と着点の両方の意味を有することが共通点となっていること、怒りを表す形容詞に前置詞atを伴う形式は他動性が高いということにも触れた。

第6章では、名詞句における前置詞atを扱った。名詞に伴う前置詞を調査した先行研究はあるものの (小川1997)、コーパスで実例を見ていくと、実際には多様な前置詞が後続する。そこでまずは、名詞にat a 名詞あるいはat the 名詞が後続する場合を調査したところ、[名詞 (時間表現) at a time] や [名詞 (professor, researchers, student)

at the university]の表現が多く見られた。前者は前置詞atがひとまとまりの時間を表すために「点」の意味になっている一方で、後者は大学という場で活動・機能していることを表すために「場所」の意味になっていることを指摘した。また、第4章と第5章で扱った動詞／形容詞に対応する名詞に後続する前置詞atについても、コーパスで実例を収集し、動詞や形容詞の場合とは前置詞の分布の仕方が異なっていることがわかり、それぞれの品詞で詳細に検討する必要があることが示唆された。また、前置詞atが使用される場合には、「点」と「場所」の意味がどちらも機能していることが確認された。

最後の第7章では、第3章から第6章にかけて様々な表現における前置詞atの意味を議論したことを踏まえ、結論として、(i)と(ii)の問いに対する主張が成り立つことを示した。本論考の意義としては、①前置詞atの意味についてこれまでの研究を統合し、多義の考え方を採用しつつも、「点」と「場所(ところ)」という2つの意味が中心的に働いており、その2つの意味の認知基盤となるイメージ・スキーマを上位スキーマ(スーパー・スキーマ)として据えたこと、②前置詞atの「点」と「場所」の意味を繋ぐ認知基盤について、前景化・背景化というシンプルな操作を設定したこと、③修飾被修飾の関係にある様々な表現との関連において前置詞atの意味を検討したことが挙げられる。その一方で、本論考で扱った前置詞at句によって修飾される動詞や形容詞、名詞は限定的であるため、イデオム等も含め分析対象を増やすこと、否定証拠を増やすこと、他の前置詞との関係にも言及していくことという観点で改良の余地がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (田 尾 俊 輔)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	田村幸誠
	副 査	教授	大森文子
	副 査	教授	井元秀剛

論文審査の結果の要旨

田尾俊輔氏の博士論文『英語前置詞 at の意味論－「点」を生み出すメカニズム－』は、英語前置詞 at の非常に多岐にわたる意味と語法を認知言語学の観点から統一的に記述することを試みたものである。特に、博士論文全体のテーマとして、次の二つの問い、(I) と (II) を立て、それに対して、(III) の視点から前置詞 at が様々なコンテキストで取りうる意味的共通性と差異を捉えようとしたものである（(I)、(II)、及び (III) は博士論文から抜粋）。

(I) 英語前置詞 at の意味は何であるのか。

(II) その意味がどのようなメカニズムで生じているのか。

(III) a. [X at Y]という表現形式には、図の X と地の Y という位置関係だけでなく、この表現を使用する人（話し手／書き手）が Y を俯瞰するという関係も関与。言い換えると、図と地の構造の関係が二重に存在。

b. 話し手／書き手がYを俯瞰する際には、Y 以外（Y の背景）の部分が必要。すなわち、Y が図で Y 以外が地。

c. Y 以外の部分がどの程度前景化（もしくは背景化）されるかによって、前置詞 at が指すのが「点」であるのか「場所」であるのかが決まる。

後述するが、全体として、小さなテーマを丹念に調べ、考察し、そこから大きな理論的含意を引き出そうとする大変優れた博士論文であると判断できる。

各章の要旨を述べると、第1章「序論：言語学における意味論の展開」では、言語学における意味論のあり方に関する議論が特に形式文法との比較で述べられている。以下の章において重要な働きをする主観的な意味観に関する理論的な振り返りが認知言語学の歴史とともに行われている。第2章「英語前置詞の意味研究」では、認知意味論の基本概念が英語前置詞との関係でどのように説明され得るのかを示した上で、上記(I)から(III)のテーマが導かれている。第3章以降は第2章で提案された(III)を具体事例とともに論証していく形で論が進められている。第3章「空間や時間を表す英語前置詞 at」は本博士論文の中核的部分と考えられる章で、前置詞の最も基本義であると考えられる空間の意味に関する議論が上記 (I)から(III) のテーゼの元でどのように捉えることができるのか議論されている。特に、従来より英語前置詞 at の意味は、「点」的なものであるのか、あるいは、「場所」的なものであるのか、という論争があるが、その両面が前置詞 at の記述には必要であること、そして、その連続性を捉える認知的メカニズムが提案されている。第4章から第6章にかけては特にコロケーション、イディオムの表現に見られる at の意味に関する議論が行われ、特に、第4章「動詞句における英語前置詞 at」では、動詞句における at、第5章「形容詞句における英語前置詞 at」では形容詞句における at、そして、第6章「名詞句における英語前置詞 at」では名詞句における at がそれぞれ取り上げられ議論されている。特に、各々の章でコーパス・データを用いた分析がなされ、第2章及び第3章で展開された本博士論文の主張をより客観的に説明することが試みられている。従来の研究では、イディオムの中に生じる at は例外的なものとして別扱いされる傾向にあるが、本博士論文では、第3章で示した空間的な

意味との連続的な説明が可能であることが示されている。第7章「結論：英語前置詞atの意味論」では本博士論文全体の振り返りが今後の展望とともに示されている。

「英文法」の分析の歴史は長く、特に英語前置詞の意味機能に関しては、伝統文法、英語語法、理論言語学（意味論、語用論）、国内外の前置詞を専門に扱った多くの辞書、あるいは英語教育への応用とさまざまなところで記述・議論されてきた。英語前置詞を扱う以上、そういった膨大な研究の歴史とどのように向き合い、新たな研究成果を出すかということが英語学の論文としては重要なところであると考えられる。本博士論文の1つの問題は、過去の先行研究を今回の博士論文がどのように進歩させたのかが明瞭になっていない点にあると言える。言い換えると、本博士論文において十分に整理できていない点は上記の伝統的な記述の成果と問題点に対して自身の提案が具体的にどのように優位であるのかが説明しきれていない点にあると言える。第4章から第7章において、コーパスで多様な実例を示したこと、そしてその頻度等を明らかにしたことは大変評価できる。しかし、それぞれの例文のタイプそのものはすでに上記の国内外の前置詞を専門に扱った辞書で取り上げられているものばかりである。もし十分に伝統的な記述の成果を振り返っていれば、今回のコーパス分析のどの部分が新しく、どの部分が従来の記述をサポートする部分であるのかが明確になり、より論文としての価値が上がったように思われる。また、認知言語学を含めた理論言語学においても「記述の例」として多数英語前置詞は取り上げられ議論されている。本博士論文で展開されている、「点」がコンテキストによって「場所」の解釈を生むというメカニズムは、理論言語学の観点から見れば例文の読みに合わせたアドホックなものという印象を与えるものであり、一般認知原理等との関係で根本から議論されているものとは言い難い。従って、公聴会の質疑応答でも論文審査担当者及びフロアからの質問で度々指摘されていたように「点」と「場所」の定義をもう少し綿密にすべきであったという点が今後の課題として残る。ややもすると、記述面、理論的な面、両方において先行研究に対するリスペクトがない論文として写ってしまう可能性がある（これは紙幅の関係上仕方ないことであるがやはり伝統的な記述にもう少し踏み込んで十分な先行研究のレビューをすべきであったと考える）。

「英語前置詞の意味機能」というテーマはこれまでたくさんの研究者によって取り組まれてきたテーマであり、それに対して新たな視点から新たな成果を得るということは大変難しいものであると考えられる。しかし、様々な個別的な難点はあるものの、本博士論文はその問題に対して様々な角度から検討し、従来の記述分析にみられたわずかな理論的不備や説明の不統一な部分を解消しようとした点は大変評価できる。特に、前置詞atの意味についてのこれまでの先行研究の多様な視点の統合を試み、「点」と「場所」という2つの意味の認知基盤となるイメージ・スキーマを上位スキーマ（スーパー・スキーマ）として据えたことは意義深い。「私たちの視界においては、前景化される（目立つ）要素が多くなればなるほど『場所』として認識され、背景化される（目立たなくなる）要素が多くなればなるほど『点』として認識される」という観点から、連続性のある認知の仕組みをモデル化し、「点」と「場所」という一見相容れない2つの意味を、連続的なスキーマの中に位置づけ、関係のあるものとして捉えようとする姿勢は、挑戦的で、評価に値する。本論文で提案された連続体としてのイメージ・スキーマを個々の用例の分析の道具立てとしてどのように活用するかについては、さらなる工夫の余地が残されているが、今後、より考察を深めることにより、個々の用例における at の意味を単に「点」あるいは「場所」のいずれかに分類するという発想から脱却した、まったく新しい意味理論を確立できることが期待できる。その点で、本論文は今後大きな発展の期待ができる研究であると言える。

以上から博士（言語文化学）の学位論文として大変価値のあるものであると認められる。